

第1章

東日本大震災発生

経験したことのない強烈な揺れの後に続く、ライフラインの途絶。信じられないような大津波。被災者があふれる中で、生存への道がどのように模索されたのか。一人の社会福祉協議会職員のレポートにより、当時を振り返ってみよう。

1.1 激動の三日間 ～ある一人の社協職員の視点から～

1.1 激動の三日間 ～ある一人の社協職員の視点から～

1.1.1 ○平成 23 年 3 月 11 日／当日

無我夢中で町内を駆け回り夜を迎える

通常通り事務所内にて勤務中に発災。事務所内にいた職員とともに建物の外に避難。揺れが収まるまでその場で待機。あまりの揺れの大きさと、縦揺れと横揺れがからみあった、気持ちの悪い長い揺れに、ただごとではすまない恐怖心で頭の中がいっぱいになった。

揺れが収まると同時に、私（小野哲・七ヶ浜町社会福祉協議会職員）は、渡邊信男事務局次長（以降、渡邊次長）やヘルパーと相談し、まずは指定管理経営している七ヶ浜町障害者地域活動支援センター「あさひ園」の施設状況や、利用者の状況を確認。けが人なし、建物の目立った被害なしと判断し、町役場の地域福祉課へ向かう。

地域福祉課と相談し、地域福祉課と健康増進課は介護保険利用者世帯と二人暮らし高齢者世帯へ、社協は単身高齢者世帯の避難誘導へ分担して向かうこととした。町役場のロビーにて渡邊次長と相談したところ、渡邊次長は「あなたは家族のある身なので、内陸部の家屋が倒壊した世帯はないか、単身高齢者世帯を中心にまわるように。」との指示を受けた。せめて反対方向からと提案するも、「効率のいい回り方があるから、まかせておきなさい。」と、経験に裏打ちされた強い言葉だった。40分後には事務所へ戻るようにとの指示を残して、次長は海岸沿いの単身高齢者宅へと避難誘導に向かった。

涙をこらえながら境山地区を走り、特に大きな被害がないことを確認して遠山地区に向かうと、単身高齢者が比較的密集している地区にさしかかった。胸騒ぎがして車を止め、単身高齢者宅に入ると、一人でがたがた震えながら、「もう終わりだ。大変なことになった。」と悲痛な叫び。彼女は普段からお年寄りにこまめに声掛けをしている中心的な存在だったので、すぐ目の前の空き地にみんなを集めて、余震に備えるように諭した。隣のお宅を訪問すると、いつもは落ち着いていた感じの方が、こたつに座ったまま震えていた。「外の空き地に避難しましょう。」と声がけするも、「死ぬときは誰にも迷惑かけないで、この家の中で死にたい。だから外には行かない。」と強く否定された。これではだめだと思い、また違う家の方を訪問し、一緒に説得してもらおうと考えた。しかし、「私も同じ気持ちだ。なんとしても逃げなきゃいいのか？」と聞かれる。「命があれば何度でもやり直せる。まずは自分の安全を確保することが、人に迷惑をかけない一番の行動だ。」と伝え、なんとか屋外に連れ出した。よく人の集まる単身高齢者宅へ一緒に行き、まずは1回外に出ることを促した。そんなことを行っているうちに約束の40分が近づき、他の地区は車で走りながら目で確認するのが精いっぱいだった。

事務所へ帰所すると、渡邊次長はまだ戻っておらず、慌てて“災害時優先電話”を使用して次長の携帯への連絡を試みる。個人の携帯電話が使用できない中、この優先契約をしていた携帯電話は、渡邊次長の携帯へと結びつけた。「大丈夫ですか？」とたずねると、「今、海

岸の防波堤に船がドーンドーンとぶつかる大きな音がしている。徐々にせり上がってきているから今すぐ高台へ逃げるから！」と言い残して電話が切れる。しばらくして渡邊次長が事務所へ戻ってきたときには安堵で胸をなでおろした。

事務所から菖蒲田浜を眺めると、いつもは海がよく見えているのに、この日は大粒の真っ白い雪が降り、視界を遮っていたため、海は全く見るができなかった。すぐ下の汐見台6丁目まで階段を下っていくと、避難してくる住民とすれ違った。下まで行くと、第1波が襲った後のようで、白い湯気のようなものが立ち上っていて、非常に不気味で、それ以上進んではいけないという直感から、6丁目の区長宅に声をかけ、まわりに大声で「津波が来ます。高台に避難してください。」とお願いするのが精一杯だった。

留守を担当していたボランティアコーディネーターの星真由美（以降、星コーディネーター）は、事の重大さにまだ気づかないでいたが、役場に勤めている妹が社協玄関に来て「早く家に帰って！ 私は業務で帰れない、すごいことになっているよ！ 家も心配だから……」と言われた。

しかし、社協も続々と避難してきた住民が集まってきており、デイルームを開放して、できうる限り避難者を受け入れる努力をした。事務所は電気が止まり、断水していた。トイレの水も出ない状態だったため、自宅には戻れずにいた。私（小野哲）と星コーディネーターは、予め購入していた「天使のトイレ」などの非常用トイレセットをもって来ようという話になり、「あさひ園」に隣接していた災害用備品倉庫へ二人で向かった。

トイレを車に積み込んだところで、自宅が心配になった星は、私と共に自宅に向かうことにした。中央公民館前の道路を下り、銀行前に向かおうとしたところ、通行止めで、道路が水びたしになっていた（まだ、流失物は銀行前の田圃には流れて来てはいなかった）。引き返して社協の事務所に戻り、トイレの設置を私に任せ、汐見台団地を經由し、向洋中前を通るルートで松ヶ浜の自宅に向かったが、ここもすでに車が通れる状況ではなく、歩いて行くにも不安でそのまま社協事務所に戻らざるを得なかった。

一日目は総勢28名の避難者と、社協の職員10名程度がそのまま一夜を明かすこととなった。外の駐車場には車で避難し、そのまま車で過ごしていた人もいた。夜になると寒さが身に沁みるようになり、避難してきた住民へ、電気のいないストーブを持っていないかをたずねると、3名が手を挙げてくださり、社協の車で後程お借りしに行った。また、横になりたい方のために、毛布等を準備したかったが、これも事務所には無く、住民の方々に声掛けして、毛布を提供していただいた。この日の夜は職員が自宅から持ってきた、結婚記念の大きなろうそくの火を頼りに職員はイスなどに腰かけたまま一夜を過ごした。

《トピックス》 職員の家族の安否確認はどうしたのか？

仙台市の自宅から出勤していた私は、発災直後に一度妻と連絡が取れて以来、子どもたちの安否などは確認できずにいた。不安は大きかったが、直後の混乱の中で行動しては2次被害の危険が高いため、職場における対応に集中することとした。

夜の11時、避難者も職員も寝静まった頃合いを見て渡邊次長に相談し、仙台市宮城野区の自宅へと帰宅させていただくことができた。当時、小学校4年生の娘と小学校一年生の長男、保育園にあずけている3歳の次男がおり、真っ先に保育園に向うも、真っ暗で門は閉じていた。次に小学校に向かうと、体育館が避難所になっており、大勢の避難者で一杯になっていた。妻のそばで子ども3人が眠っており、寝顔を見てホッと胸を撫でおろした。妻が職場から「保育園の再開など、状況が安定するまでは子どもと一緒にいるように。」と言われたとのことで、普段からの妻の職場との信頼関係に救われた思いがした。妻に職場へ戻らなければいけないことを伝え、避難所生活する上で足りないものがないか聞いた。毛布や掛布団がないとのことで、自宅に戻り、届けて再び職場へと戻った。

発災直後に、家族のことが気になってすぐに行動に出ていたら、道中どんな目に合っていたか、背筋が凍る思いである。被災前に小学校で毎年行われていた、「引き渡し訓練」があったおかげで、子どもたちは予め決めていた家族が迎えに行くまで学校に留まることがわかっていた。また、保育園も家族と一緒に訓練は行っていなかったものの、家族が迎えに来るまで保育園で預かることは確認していた。いざというときの決め事をしっかり行っていたことで、家族の冷静な行動につながったと思う。

わずか数分の再会であったが、その後の激務に向かう勇気と、被災者のためにできることを精いっぱいやろうと決意することができた。

その後は車にガソリンを入れることができず、自宅に戻ることができない日が続いた。

1.1.2 ○平成23年3月12日／2日目 避難者への炊き出しの手配に追われる

次の日は近くの石油コンビナートが火災のため、黒い煙がもうもうと立ち上がっていた。貯蔵タンクへの引火が考えられたため、付近の住民が一斉に避難を余儀なくされた。その影響で、社協の事務所やその下の駐車場として使っていた敷地も避難してきた住民の車で満杯となった。建物内も事務所をはじめ、すべて避難者であふれ返り、これ以上は引き受けられない状況で他の避難所、町指定の避難所へと行っていたただよう促すしかなかった。外は避難住民で車の渋滞が続いていた。



七ヶ浜町に隣接する石油コンビナートから上がる黒煙

渡邊次長と二人で朝早くから炊き出しの食糧の調達に役場と社協を往復し、避難者の増加に伴い役場の炊き出しと一緒に加わることで、なんとか分け合って2日目の昼ごはんまでは調達できたが、役場にも備蓄の食糧がなくなったことを聞かされる。仕方がなくその夜の配給はお菓子の袋をいくつかいただき、中身を少量ずつ避難者とともに分け合うこととなった。

災害ボランティアセンター立ち上げの決意

朝の炊き出しに続き、昼の炊き出しの手伝いを渡邊次長と二人で行いながら、今後の社協のやるべきことを話し合っていた。やはり、被災地への支援が届けられる際に、いち早く手を挙げられるように、災害ボランティアセンターを立ち上げておく必要がある。特に、七ヶ浜町の地理的特性で、支援の手が国道45号線を通って多賀城市から塩釜市と流れ、七ヶ浜町が取り残される可能性が大きいことから、支援を受け入れる体制が整っていることを発信し、支援の目を届きやすくするためにも、災害ボランティアセンターを立ち上げなくてはならないことを確認した。

2日目の午後に星庄衛事務局長（当時）と渡邊次長、私、星コーディネーターと相談し、立ち上げまでの段階を相談した。

まずは避難所対応に追われている現状を整理し、事務所機能を取り戻すことが先決となった。そのた



七ヶ浜町社協事務所の外観

め、避難住民 100 名ほどの中にいた、区長 2 名、町議会議員 2 名に集まっていただき、上記の社協に課せられている役割を説明。「町の今後のために必ず必要なこと」と賛同していただき、同日午後 4 時に避難住民を集めての説明を行った。

- ・現在臨時の避難場所として開放しているが、正式なものではないため、今後は炊き出し等の支援は受けられないこと。
- ・セヶ浜町社会福祉協議会は、大規模災害が起こった際に、災害ボランティアセンターを立ち上げ、県内外から支援に訪れるボランティアをはじめ、支援の手を受け入れるための窓口としての機能を期待されており、この事務所がその拠点となること。
- ・できる限り早い災害ボランティアセンターの立ち上げが求められること。
- ・そのためにはこの事務所だけでも開放していただき、避難所としては継続してデイルームをお使いいただきたいこと。

以上を主な趣旨として、避難者を代表して岡崎正憲氏に説明していただいた。異論を述べる方は一人もおらず、説明が終わるとすぐに「日の明るい内に自宅の様子を見に行ってくる。」と、多くの方が今後の自分たちの身の置き方を考えてくださった。帰ってくると、「家の中はぐちゃぐちゃだけど、少し片づければなんとか寝る場所くらいは確保できそうだから。」とその日のうちに自宅に戻る方もいれば、「今晚一晩だけみんなと一緒にいさせて欲しい。」とお願いされる方もいた。一様に状況を理解していただいたようで、気持ちが一つにまとまることができ、明日からの覚悟を社協職員一同も確認することができた。

家族の安否が確認できないまま、職員と共に避難者支援を行い、不安な一夜を過ごした星コーディネーターは、災害ボランティアセンターの設置を決意した夕方、昨日とは別の道を通り、松ヶ浜小学校に避難していた家族と安どの再会を果たした。家族に自らの今後の使命を伝え、家族ができるだけ近くにいた方が仕事に集中できると判断し、しばらくの間社協事務所で家族も一緒に過ごすことになった。

その日の夜は最大 86 名の避難者とともに過ごし、横になるスペースはほとんどなく、机や壁によりかかって寒さをしのいだ。職員は交代で給湯室のスペースで横になった。

〈トピックス〉 避難行動と臨時避難所にて ～汐見台在住 岡崎正憲氏より～**◎ 3月11日**

生涯で経験をしたことがない、何とも凄まじい揺れが収まるとほぼ同時に、議場を飛び出し建物が無事であることを見極め、急いで自宅にもどる。

自宅が無事であり、家具類も倒れていない状況を見たたん「寒い！」と感じジャンパーを着て再び表に飛び出す。行動が不自由な隣の両親の無事を確認するとともに、車で避難しようとしていた向いの奥様に両親を連れて避難することをお願いし、行動を共にしてもらう。後に合流。

町内の第一避難場所である中央公園を見ると、50人近い住民が集まっている。異常で、消しようのない胸騒ぎを覚え、さらなる高台の県道横の公園に移るよう行動を起こしてもらう。誰も不審がることもなく移動した。町内を大声で避難を呼びかけながら走ると、飛び出してきて避難する方もおられた。

高台の公園に行くと、100人近い方が避難し、雪が降り出す中で不安そうに眼下を眺めている。いつまでも屋外に居てもらふ訳にはいかない。役場まで様子を見に行きながら、汐見保育所と社協事務所に声を掛け、住民避難を快く了解してもらう。汐見保育所に70～80人が入り、自ら名乗り出た方にリーダーとなっていただく。後の20～30人が社協事務所に避難する。

とにかく寒い。石油ストーブや毛布を貸してくれる方を探し、了解を貰って取りに行く。既に津波が町内を襲っていたが、雪で状況がわからない。七十七銀行まで様子を見に行き唾然とする。家が車が乗りあがっている。保育所と社協事務所にもどり、住民に状況を説明する。一様な驚きが広がるが、ここなら安全であることを伝え、落ち着きを取り戻す。余震とコンビナートの爆発音に怯えながら夜を過ごす。職員の心遣いに感謝しながら……。

この時始めて人に指摘され、ネクタイを外す。避難所には、避難者の中からの代表者（司令塔）が必ず必要。自薦が最高だが、他薦でも可。指示も苦情受けも一本化されることは、秩序維持の最大の味方である。

◎ 3月12日

幸い、社協事務所へ避難した方で自宅を津波で流された方はいないようであり、室内や屋根の被害で済んだようである。しかし、障害を持った方の家族が訪れ、「昨晩は自宅にいたが、寒いし不安だ。ここに連れてきて一緒に過ごさせて欲しい。」とのこと。まともな収容スペースはないが、皆さんが喜んで受け入れてくれた。ありがたかった。生活弱者の避難所設備の必要さを痛感する。

さらに課題が発生。社協事務所は災害ボランティアセンターにしなければならない。これも社協に与えられた重要な役割である。ホールの明け渡しが必要になる。職員との打ち合わせの結果、住民への説明、説得を引き受ける。他の避難所に掛け合い最低限の引き受けを確認後、ホール内の全員に説明を行う。出て行ってもらうことを説明することは、胸を刺されるような思いであったが、致し方がない。心を鬼にして言うしかない。しかし、皆さんの理解は早かった。皆さんの心の優しさに涙が流れた。ありがとう。

自宅を確認に行く方、今晚だけはここで一緒に過ごしたいと言う方。静かに、心の温かさを感じながら時間が過ぎていく。この日の夕方、連絡が取れなかった妻が無事であることがわかり、社協事務所に合流。皆さんの拍手をもらい照れ臭かった。

◎ 3月13日

朝になると、皆さんそれぞれに挨拶を交わし、社協職員に熱いお礼を言いながら自宅に帰って行った。ホールは空になり、一体何があったのだろうかとの思いに、しばし呆然。二晩を共に過ごした貴重な時間と、そこで見られたいたわりの心が、それからのボランティアセンター立ち上げと、1年以上に亘る毎日の活動への協力にどれだけの力になったか……。

1.1.3 ○平成23年3月13日／3日目 社協事務所にて災害ボランティア センタースタート

朝になると避難者の動きも活発になり、8時の段階で職員以外、避難者が一人もいなくなった。車イスの両親とともに避難していた岡崎氏も、他の避難所にあてがついたからと、移っていかれた。1日2日の避難所生活であったにも関わらず、避難住民の方々は感謝の言葉と励ましの言葉を残していただき、大変うれしかった。



3月13日 9:00 社協事務所前に掲げられた看板



社協デイルームに設けられた災害ボランティアセンター

住民の期待に応えるべく、これまで積み上げた災害ボランティアセンターのノウハウを、星コーディネーターを中心として結集し、早速その日の10時に災害ボランティアセンターの看板を社協の正面玄関に掲げた。

事務所前の道路には、役場水道事業所の給水に並ぶ人の列が途切れることなく続いていた。役場職員も総出で対応に追われ、3日目ともなり疲労の色が出始めていた頃である。



開設当初の受付を手伝う高校生

2年生になる娘さんの友人たちが、ロコミで呼びかけ、そのお兄さんやその友人たちと、若い世代がぞくぞくと集まりだし、手探りのボランティアセンタースタートを支えた。

看板を掲げるとすぐに、町内の若者が訪れ、第一号の登録者となった。活動メニューは決められていなかったが、水道事業所にかきあひ、給水活動の補助にボランティアを派遣することになった。続けて埼玉県からヒッチハイクで駆けつけてきたという。その後は星コーディネーターの高校



3月13日 10:00 役場水道事業所前に給水の列に並ぶ住民

1.1.4 ○平成23年3月14日～/4日目以降 ボランティアセンター移転

3月15日に、自衛隊や日本赤十字社(以降、日赤)など全国から続々と集まり出した救援物資を、屋内ゲートボール場「すぱーく七ヶ浜」に集めることに決定される。災害ボランティアセンターの設置場所として、震災前には中央公民館を想定していたが、町内最大の避難所となったことで、この屋内ゲートボール場「すぱーく七ヶ浜」が災害ボランティアセンターの場所として検討されることとなった。



3月16日頃 全国から届けられる救援物資を運ぶ若者達と避難所のみなさん。

3月18日から「すぱーく七ヶ浜」でのボランティアセンター開所準備(ブルーシートを貼る、パーテーションを立てる、暖を取るテントを張るなど。)が進められた。



「すぱーく七ヶ浜」に拠点が移り、地元の若者たちが続々とボランティアに参加した。

3月19日から正式に屋内ゲートボール場「すぱーく七ヶ浜」の一角が、七ヶ浜町災害ボランティアセンターとして新しくスタートを切った。

<七ヶ浜町社会福祉協議会 小野哲>



3月24日頃 朝のオリエンテーション。地元の若者が中心だった。